

平均値シフトの性質

京都大学大学院情報学研究科 山崎 遼也
京都大学大学院情報学研究科 田中 利幸

平均値シフト (MS) アルゴリズムは、カーネル密度推定量 (KDE)

$$\hat{p}(\mathbf{x}) = \sum_{i=1}^n w_i K(\mathbf{x} - \mathbf{x}_i) \quad \left(\text{ただし, } w_i > 0 : \text{重み, } K(\mathbf{x}) : \text{カーネル関数} \right)$$

のモード (極大値) を、適応的に決定されるステップサイズを用いた勾配上昇法

$$\mathbf{y}_{t+1} = \mathbf{y}_t + \eta_t \nabla \hat{p}(\mathbf{y}_t) = \mathbf{y}_t + \mathbf{m}(\mathbf{y}_t) = \frac{\sum_{i=1}^n \mathbf{x}_i w_i G(\mathbf{y}_t - \mathbf{x}_i)}{\sum_{i=1}^n w_i G(\mathbf{y}_t - \mathbf{x}_i)}$$

$$\left(\text{ただし, } \eta_t = \frac{1}{\sum_{i=1}^n w_i G(\mathbf{y}_t - \mathbf{x}_i)} > 0, \quad \mathbf{m}(\mathbf{x}) = \frac{\sum_{i=1}^n \mathbf{x}_i w_i G(\mathbf{x} - \mathbf{x}_i)}{\sum_{i=1}^n w_i G(\mathbf{x} - \mathbf{x}_i)} - \mathbf{x} : \text{MS 関数, } \nabla K(\mathbf{x}) = -\mathbf{x}G(\mathbf{x}) \right)$$

により求めることで、確率密度関数 $p(\mathbf{x})$ のモードを推定する。

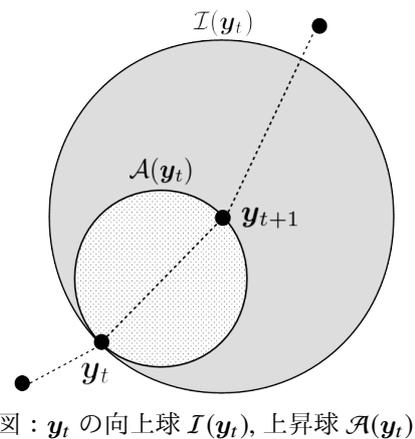
既存研究 [1–5] では、モード推定系列 $\{\mathbf{y}_t\}_{t=0,1,\dots}$ と密度推定系列 $\{\hat{p}(\mathbf{y}_t)\}_{t=0,1,\dots}$ の収束性について研究されてきた。しかし、これらの研究では、モード推定系列が (収束するならば) どのように収束するかということや、密度推定系列がどのように増加するかということなどの、より詳細な挙動は明らかになっていない。これは、 $\{\mathbf{y}_t\}_{t=0,1,\dots}$ のみに注目した議論がなされているためであると考えられる。

本研究では、MS 関数の性質を詳細に調べ、 \mathbf{y}_t の近傍における KDE $\hat{p}(\mathbf{x})$ の挙動について次の結果を得た。

定義 (向上球, 上昇球). MS 関数 $\mathbf{m}(\mathbf{x})$ と点 \mathbf{x} に対して、 \mathbf{x} における向上球 $\mathcal{I}(\mathbf{x})$ を中心が $\mathbf{x} + \mathbf{m}(\mathbf{x})/2$ で半径が $\|\mathbf{m}(\mathbf{x})\|/2$ の球体と定義し、 \mathbf{x} における上昇球 $\mathcal{A}(\mathbf{x})$ を中心が $\mathbf{x} + \mathbf{m}(\mathbf{x})$ で半径が $\|\mathbf{m}(\mathbf{x})\|$ の球体と定義する。

定理 1. K がある条件を満たすとき、ある点 \mathbf{x} と $\mathbf{y} \in \mathcal{I}(\mathbf{x})$ に対して、 $\hat{p}(\mathbf{y}) \geq \hat{p}(\mathbf{x})$ となる。さらに、 \mathbf{y} が $\mathcal{I}(\mathbf{x})$ の内部にあるとき、 $\hat{p}(\mathbf{y}) > \hat{p}(\mathbf{x})$ となる。

定理 2. K がガウスカーネルであるとき、ある点 \mathbf{x} と $\mathbf{y} \in \mathcal{A}(\mathbf{x})$ に対して、 $\nabla \hat{p}(\mathbf{y}) \cdot (\mathbf{y} - \mathbf{x}) \geq 0$ となる。さらに、 \mathbf{y} が $\mathcal{A}(\mathbf{x})$ の内部にあるとき、 $\nabla \hat{p}(\mathbf{y}) \cdot (\mathbf{y} - \mathbf{x}) > 0$ となる。これより、 $\nabla \hat{p}(\mathbf{y}) \neq \mathbf{0}$ も従う。



さらに、これらの結果に基づいて、いくつかのより具体的な MS アルゴリズムの性質を解き明かした。本発表では、本研究で得られた MS アルゴリズムの性質を紹介するとともに、その応用方法について議論する。

参考文献

- [1] D. Comaniciu and P. Meer, “Mean shift: A robust approach toward feature space analysis,” *IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence*, vol. 24, pp. 603–619, May 2002.
- [2] M. A. Carreira-Perpiñán, “Gaussian mean-shift is an EM algorithm,” *IEEE Transactions on Pattern Analysis and Machine Intelligence*, vol. 29, pp. 767–776, May 2007.
- [3] Y. Aliyari Ghassabeh, “On the convergence of the mean shift algorithm in the one-dimensional case,” *Pattern Recognition Letters*, vol. 34, pp. 1423–1427, Sept. 2013.
- [4] Y. Aliyari Ghassabeh, T. Linder, and G. Takahara, “On some convergence properties of the subspace constrained mean shift,” *Pattern Recognition*, vol. 46, pp. 3140–3147, Nov. 2013.
- [5] Y. Aliyari Ghassabeh, “A sufficient condition for the convergence of the mean shift algorithm with Gaussian kernel,” *Journal of Multivariate Analysis*, vol. 135, pp. 1–10, Mar. 2015.